脊椎疾患・腰痛

医療法人社団くわのみ会

桑園整形外科

札幌市中央区北8条西16丁目28-30
☎011・633・3636　http://www.dr-azuma.net

本間信吾 名誉院長

ほんま・しんご／1971年北大医学部卒業。北大医学部整形外科医局入局。79年アイオワ大学留学（脊椎バイオメカニクス）。80年市立札幌病院整形外科部長を経て、2009年桑園整形外科副院長に就任。11年医療法人社団くわのみ会名誉院長に就任。日本整形外科学会認定医。日本リウマチ登録医。日本整形外科学会脊椎・脊髄認定医。

脊椎・腰痛治療で30年以上の実績
メスを使わず心身の痛みを解消

市立札幌病院で整形外科部長を務めるなど30年以上、脊椎疾患や腰痛の治療をおこなってきた桑園整形外科の本間信吾名誉院長。他院の整形外科医に対して技術指導をするなど院内外を問わず、高い評価を受けている。

保存治療を優先した患者の体に負担のかからない治療が基本方針で、これは膝痛治療を得意とする同院の東裕隆理事長と同様だ。

一人ひとりの患者に対し、丁寧な診療をおこなっており、最初に患者、そしてその家族からじっくりと話を聞き、痛みの原因や程度を掌握する。

「痛みの原因がわからなければ良い治療はできません。また、人は痛みがあると不安になります。精神的な弱みや思い込みは症状をさらに悪化させるため、まず治療への不安を取り除くことが先決」と単に痛みを取り除くだけではなく、同時に精神面のケアも図るのが特長。徹底した〝患者本位の医療〟だ。

治療方針の決定においても本間名誉院長らしさが出ている。

「医師がこうすべきだと強く主張すれば、患者はうなずいてしまうものです。患者にとって強い立場にあるからこそ医師は謙虚でなければなりません」と言う。専門家の立場から最適な治療方法を提案しつつ、患者の治療に対する希望や要望なども踏まえ、治療方針を決定している。

「メスを使わずに治療できるのが理想的であり、手術は最終手段」と言う本間名誉院長だが、オペの腕は確かだ。これまで5000例以上。現在も年間100例以上を執刀しており、手術をしなければ良くならない場合でも安心して手術を任せられる。可能な限り手術を回避し、必要な場合は手術も得意。患者にとって理想的な医師のひとりだ。

例えば、高齢者に多い「腰部脊柱管狭窄症（ようぶせきちゅうかんきょうさくしょう）」でも豊富な治療実績を誇るが、やはり保存療法が主体。腰部脊柱管狭窄症は、神経の通り道である脊柱管が加齢とともに狭くなり、神経組織を圧迫し痛みを発生させる疾患。主な症状としては歩行時の下肢のしびれや痛みなどがある。

まずは運動療法や神経ブロック療法、生活動作指導などで症状の改善を図り、それでもなお痛みが残る場合にのみ手術をすすめる。しかも「手術は、神経への圧迫を取り除く除圧術と金属を使って骨を固定する固定術がありますが、まずは除圧術だけをおこない、体への負担や状態を考慮しながら二次的に固定術を実施します」と、ここでも患者本位を徹底している。

腰部脊柱管狭窄症のレントゲン図。脊柱管が狭くなり、神経が圧迫されて痛みが発生する

JR桑園駅から徒歩5分のため通院もしやすい